

## 島根県松江市方言のダについて

千葉 軒士(中部大学)

### 要旨

島根県松江市方言では、異なる機能を持つ2つのダを確認することができる。1つは、「春だ」のように前接する語のみでは文として成立しないものに接続し、文を成立させる(=述語化の機能を担う)ダ[ダI]であり、これは共通語で用いられる断定助動詞ダと同様のものである。そして、もう1つは、「寒いだ」のように、ダの前の部分まですでに文として成立しているものに選択的に付加される(=文成立に直接関係しない)ダ[ダII]であり、これが松江市方言で特徴的に用いられるダである。

このダIIの特異性は過去の助動詞「タ」や共通語の丁寧表現とされる「デス」と共起させることでより明らかとなる。また、インフォーマントとの面接調査の結果を精査すると、このダIIの意味機能は状況確認であり、複数の共通語の終助詞の働きを担っていると推察される。

### 1. はじめに

本稿は島根県松江市方言で文末に用いられるダに注目し、当該方言話者との面接調査を通して、ダの役割・機能を明確に記述するものである。当該方言におけるダについての詳細な研究は見られないが、神部(1982)は以下のように記す。

ついで注意されるものに、断定助動詞「ダ」から転成した文末詞がある。

ナカナカ ナオラン ダ。(なかなかおらないよ。)(出雲南部例)

この「ダ」は出雲・隠岐に盛んであり、判断・問いかけ・命令などを表わす。石見東部にもあるが、これは少ない。(p. 236)

このように本稿の考察の対象であるダについての記載はあるものの、この記述では、このダがどのように用いられているのか、十分に把握することはできない。ここから読み取れる情報は、ダが否定のンに接続し、その意味が判断を示すということだけである。しかし、実際はそれだけでない。そこで、本稿では、2008年12月と2009年11月に行った2回の面接調査で、実際にインフォーマントにより使用が確認された例を元に、このダについてさらなる詳細な記述を行うことを目的とする<sup>1</sup>。また、本稿では松江市方言におけるダの説明に最適なものとして丹羽一彌(2009a・b)で用いられるモデルを根底に据え、今後の論を展開していく。

まず、当該方言におけるダを見よう。当該方言において、ダは以下のように用いられている。

表1 松江市でのダの出現環境

名詞など	春ダ
形容動詞語幹	鮮やかダ
そうだ(様態)	死にそうダ

動詞（基本形）	行くダ
形容詞（基本形）	寒いダ
否定形	書かんダ
たい（願望形）	書きたいダ

これより、「名詞など・形容動詞語幹・そうだ」の3項目に接続するダは共通語で用いられるダと同じ用法であるが、それ以外（表1中網掛け部分）は松江市において特徴的に用いられるダと理解することができるだろう。

## 2. ダとデス

一般的に、ダの丁寧な表現にデスがあるとされている。本節では、ダに加えデスも論じながら、ダに関する理解を深めたい。

### 2.1 ダの出現環境

丹羽一彌（2009a）では、名詞などに接続し、述語を構成するダを「述語化のダ」とする。松江市で用いられるダも名詞に接続し、述語化の機能を担う。これはLAJ46図において、島根県がダの地域であることからわかる。しかし、動詞・形容詞など、それだけで述語となれるもの<sup>11</sup>に接続することのできるダ（つまり、共通語では用いられず、松江市において特徴的に使用されるダ）についてはこれとは別の説明が必要であろう。このダは、先述の述語化のダとは異なるので、以後識別のため、当該方言において、丹羽一彌（2009a）が述語化のダとするものと同様のダをダⅠ、そのみで述語となれるものに接続するダ（述語化に関係しないダ）をダⅡと呼ぶ。表1のダを、ダⅠ・ダⅡに分類して改めて提示すると、以下のようになる。また、差異をより明確に示すため、いわゆる過去のダが接続する例も併せて提示する。

表2 松江市でのダの出現環境（ダⅠ・ダⅡの2種に分類した場合）

	ダのみ	ダとタの共起	分類
名詞など	春ダ	春ダッタ	ダⅠ
形容動詞語幹	鮮やかダ	鮮やかダッタ	
そうだ（様態）	死にそうダ	死にそうダッタ	
動詞（基本形）	行くダ	行ッタダ	ダⅡ
形容詞（基本形）	寒いダ	寒かッタダ	
否定形	書かんダ	書かんかッタダ	
たい（願望形）	書きたいダ	書きたかッタダ	

この分類におけるダⅡが、松江市において特徴的に用いられるダである。表2で確認できるように、ダⅡはダⅠとは異なる環境で現れる。ダⅠが単に述語を構成するために必要なものであるのに対し、ダⅡはこれ自身を除いた形でも述語として成立しており（つまり、オプション的要素でしかなく）、同じダでありながらもダⅠとダⅡは全く異なる機能を持っていることがわかる。基本的に当該方言におけるダの分布はこのようになるが、これとは異なった分布とな

る場合もある。それについては、 2. 3. で詳しく述べる。

## 2. 2. デスの出現環境

表 2 とは異なる分布を示すダの出現環境を示すためにも、まずは一般にダの丁寧な表現であるとされるデスを見ていこう。

デスについては丹羽一彌 (2009b) に詳しい。丹羽は、デスには 2 種類あると指摘する。丹羽一彌 (2009b) はダを丁寧にしたもの ((例) 春です (A 類のデス)) と、ダの接続しない形式を丁寧にしたもの ((例) 寒いです (B 類のデス)) との 2 つに分け、以下のように記す<sup>iii</sup>。

ダは名詞などを述語にする形式であるから、名詞述語のダを丁寧にしたデスは述語化の役割を保持しているが、単独で述語となる形容詞に接続したデスは述語化とは無関係である。  
(p. 108)

この 2 つのデスを確認したうえで、A 類のデスとダ I、B 類のデスとダ II を比較してみよう。本節の最初で述べたように、ダ I が「述語化のダ」ならば、A 類のデスも「述語化のデス」と表現することができるだろう。また、A 類のデスに対する B 類のデスは、「丁寧」の有無という違いこそあれど、ダ I に対するダ II と同様だと判断できる。つまり、A 類のデスは「述語化のデス」、B 類のデスは「述語化に関係しないデス」と置き換えて表現することが可能である。以後、述語化の観点から 2 種類のデスを述べる場合を、丹羽一彌 (2009b) と区別するために、デス I・デス II と表す。これは本稿のデスの分類も基本的には丹羽一彌 (2009b) でなされているものと同様であるが、より述語化の観点に着目した分類という立場から、丹羽一彌 (2009b) と表記を区別したいがためである。ただし、出現環境は当該方言の特徴である動詞の項目以外はすべて同様なので、丹羽一彌 (2009b) のデスの出現環境を踏まえながら先の論を展開していく。まずは以下に丹羽一彌 (2009b) の示すデスの出現環境を示す。

表 3 丹羽一彌 (2009b) に基づくデスの出現環境<sup>iv</sup>

	デスのみ	デスとタの共起	分類
名詞など	春デス	春デシタ	デス A
形容動詞語幹	静かデス	鮮やかデシタ	
そうだ (様態)	死にそうデス	死にそうデシタ	
動詞 (基本形)	×	×	
形容詞 (基本形)	寒いデス	寒かったデス	デス B
否定形	書かないデス	書かなかったデス	
たい (願望形)	書きたいデス	書きたかったデス	

表 3 のようなデスの出現環境より、丹羽はデスを 2 種に区別している。ここで丹羽がモデルとしたのは、全国共通語またはそれに近い言語であって、当該方言では出現環境が多少異なる。以下に松江市でのデスの出現環境を、丹羽一彌 (2009b) を参考に示す。

表 4 松江市でのデスの出現環境

	デスのみ	デスとタの共起	分類
名詞など	春デス	春デシタ	デスⅠ
形容動詞語幹	静かデス	鮮やかデシタ	
そうだ(様態)	死にそうデス	死にそうデシタ	
動詞(基本形)	書くデス	書いタデス	デスⅡ
形容詞(基本形)	寒いデス	寒かっタデス	
否定形	書かんデス	書かんかっタデス	
たい(願望形)	書きたいデス	書きたかっタデス	

松江市方言では、動詞にデスが接続する(表4中網掛け部分)。また、動詞はそれだけで述語成分となるものであるため、ここに現れるデスは、「述語化」に関係しないデス、つまりデスⅡと捉えられる。このデスⅡは「述語化」に関係しないため、あくまでもオプション的要素であり、文成立上必ずしも必要となる要素ではない。その機能が異なることから、ダⅠ・ダⅡの場合と同様に、デスⅠ・デスⅡも組みこまれる枠組みが異なることがわかるだろう。

### 2. 3. ダとデスの共起

当該方言においては、これまで論じてきたダとデスが共起することがある。まずはその出現環境を以下に示す。

表5 松江市でのダとデスを共起させた場合の出現環境

	デスとダの共起	デスとタとダの共起	ダの分類	デスの分類
名詞など	春デスダ	春デシタダ	ダⅡ	デスⅠ
形容動詞語幹	静かデスダ	鮮やかデシタダ	ダⅡ	デスⅠ
そうだ(様態)	死にそうデスダ	死にそうデシタダ	ダⅡ	デスⅠ
動詞(基本形)	書くデスダ	書いタデスダ	ダⅡ	デスⅡ
形容詞(基本形)	寒いデスダ	寒かっタデスダ	ダⅡ	デスⅡ
否定形	書かんデスダ	書かんかっタデスダ	ダⅡ	デスⅡ
たい(願望形)	書きたいデスダ	書きたかっタデスダ	ダⅡ	デスⅡ

ここでまず注目すべきは、ダがデスの後ろに接続することである。先述したように、一般にデスはダを丁寧にした表現だと理解されているが、もし松江市でもそのような理解がされているのであれば、このような接続はできないはずである。ここでデスの後ろに接続しているダは、デスと置き換えが可能なものではない。よって、少なくとも当該方言におけるデスは、「丁寧」を表現してはいるものの、ダの丁寧な表現に当たるものとしてのみ用いられているわけではないと言えよう。

また表5中の文はすべて、ダを除いた形式でも成立するため、ここで用いられたダはダⅡであると指摘できよう。2. 1. で述べたように、ダの分布は、ダ・デスが共起する場合とダのみで用いられる場合とでは、異なった様相を見せる。

さらに、ここでダとデスを共起させると、新たな差異が見つかる。それは、ダはデスと共起

させた場合、ダのみの場合の分布とは異なり、ダⅠが出現しないのに対し、デスはダと共起させても、デスのみの場合と分布が変わらないということである。ここから、一文中において「述語化」の機能を有する語は一つしか出現できない様子が読み取れよう。同じ「述語化」の意味機能を担う語であるダⅠとデスⅠを比較すると、デスⅠはダⅠの持たない「丁寧」という意味機能を含む点で異なる。ダとデスが共起する、つまり「丁寧」の表示が必須の条件では、デスにおいて、文成立において必須の「述語化」と同時に、漏れなく確実に「丁寧」を示すことができる。このために、ダⅠよりも優先した形でデスⅠが「述語化」の意味機能を担う（＝ダⅠ・デスⅠは共起しない）と考えられる。

一方で、ダⅡ・デスⅡはどちらも「述語化」には係らないオプション的要素であり、これらの間にも「丁寧」という意味機能の有無という差がある。しかし、ダⅠ・デスⅠの関係性とは異なり、ダⅡはデスⅡと共起可能であり、デスⅡに必ず後接する。ダⅡ・デスⅡが「丁寧」の意味機能以外の面で同等であるならば、デスⅡを使用した後にさらにダⅡを使用することは不自然である（「丁寧」以外の部分が重複していることになる）。ここから、ダⅡは「丁寧」とは別の何らかの意味機能を有しており、そのために同じオプション的要素でありながら、ダⅡ・デスⅡ間でどちらか一方だけが選択されるわけではなく、両方を共起させることができるのではないかと考えられる。これについては、4. で触れる。

### 3. ダⅠとダⅡの共起

これまで述べてきたように、ダⅠとダⅡは述語構造において担う機能が（＝属する枠組みが）異なる。そうであるならば、ダⅠとダⅡを共起させることも可能なはずである。以下の表6はダⅠ・ダⅡを共起させた際の出現環境を示したものである。また、今まで用いてきた表の項目のうち、動詞以下の項目ではダⅠが現れないことがこれまでの論より明らかなため、ここでは「名詞など・形容動詞語幹・そうだ」という、そもそもダⅠが現れうる3項目のみを表にて示す。

表6 松江市でのダⅠ・ダⅡを共起させた場合の出現環境

	ダⅠ・ダⅡのみ	ダⅠ・ダⅡ・タの共起
名詞など	×春ダダ	春ダッタダ
形容動詞語幹	×静かダダ	鮮やかダッタダ
そうだ	×死にそうダダ	死にそうダッタダ

まずは、ダⅠ・ダⅡと同時にタが共起する例を見ていこう。タが現れる文（いわゆる過去形）において、ダⅠ・ダⅡを共起させると、ダッタダのようにタを中央に介在した形でダⅠ・ダⅡが現れる。しかし、当該方言においてはタが現れない文ではダⅠ・ダⅡを共起させた文を観察することができない。ここでその理由として考えられるのは、同音回避ではなからうか。構造の観点から論じれば、ダⅠがダⅡに接続することは、一見可能のように思える。しかし、実際は当該方言では用いられない。これは、ダという同音が並列することに違和感を覚えるためではないかと考えられる。

## 4. ダIIの意味機能

ここまでダI・ダIIの出現環境等を確認し、ダIIが島根県松江市方言に特有のものであることを示してきた。では、そのダIIの示す意味機能とは何か。そもそもダIIは、通常話し相手を必要とする環境において現れる。以下の例文を見よう。

(1) 息子と話をしている

オレモ モー ロクジューニ ナルダ (俺ももう60歳になるよ)

(2) 同級生と話をしている

オレラモ モー ロクジューニ ナルダ (俺らももう60歳になるよ)

(3) 今年で何歳になるかを問われ

ロクジューニ ナルダ (60歳になるよ)

(4) 年齢を問う時

イクツニ ナルダ↑ (何歳になるの)

(1)・(2)は、通常の会話で観察される文、(3)は問いかけに対する答えを示す文、(4)は疑問文である。まず(1)と(3)は、会話の中で自然と(特に促されることもなく)出た文と、相手からの問いかけという誘発がある文との差はあるが、いずれも相手に自分の現在の状況を示したものである。またこの場合、(2)のように、相手と自分が同じ状況にある場合、つまり話し手と聞き手をまとめた「自分たち」の状況を示すものとしても使用できる。(4)は、相手の状況を確かめるための疑問文であり、これは会話の流れとしては(3)に当たるような文を引き出す役割を果たす。

また、以下のような文も観察できる。

(5) 独り言で(時計を確認しながら)

モー コンナジカンニ ナルダ (もうこんな時間になるのか)

これは、周囲に誰もいないような時に用いられる文である。(5)は(1)から(4)までとは異なり、相手がいなくても、言葉にすることで改めて自らの置かれた状況を反芻しているものと捉えられるだろう。表現を変えれば、(5)の発話の相手は、そのまま発話者である自分自身だとすることもできる。要するに、(1)から(5)までの文はすべて、何らかの状況を確認し、共有するための表現だとまとめることができるだろう。

さらに、島根県松江市方言ではダII相当箇所にはガが現れることがある。ガは松丸真大(2005)によれば、「話し手の認識を提示し、聞き手の確認を待つという働きを持つ」とある。ここで、そのガとダIIを比較することで、ダIIの意味をより深く考察していきたい。以下の例文を見よう。

(6) アシタ オレモ ロクジューニ ナルダ

(明日で俺も60歳になるよ)

(7) \*アシタ オレモ ロクジューニ ナルガ

(8) ライネン オレモ ロクジューニ ナルダ

(来年で俺も60歳になるよ)

(9) \*ライネン オレモ ロクジューニ ナルガ

(10) アシタ ヤルダ (明日やるよ)

(11) アシタ ヤルガ (明日やるよ)

上記の6文は、すべて未来の話をしているものである。(6)(7)(8)(9)は、同じ未来であ

っても、その表す時点と現在の間にある時間的な距離に差があるが、(6) (8) のようにガを用いずダⅡを用いる。だが、(10) と (11) は、未来の同じ時点の話をしているにも関わらず、ダⅡを用いるものとガを用いるものの2通りの表現をすることができる。では、ここにある違いとは何だろうか。それは、確実性であろう。(6)・(8) の文で話題となっている年齢というものは、明日だろうと来年だろうと、また当人の意思やその時点での当人や周囲の様子に関係なく、基本的には不変のものである。これに対し (10)・(11) は、取り上げている時点は同一だが、当人の意思やその時の当人や周囲の様子により大きく変わりうることを語る文である。そこには (6)・(8) ほどの確実性は無い。その確実性の高さを示したい場合に使用するのがダⅡであり、逆にあえて確実性の低さを示したい場合に使用するのがガである<sup>1)</sup>。例えば、(10) は「何がなんでも絶対にやる、絶対にできる」という確実性の高さを相手に示したい時に使用する文であり、それに対し (11) は「(忙しかったり体調が悪かったり、その理由は様々だろうが) 絶対に約束はできないが、明日やるつもりでいる」、つまり「もしかしたらできないかもしれない」という確実性の低さを相手に示したい時に使われる文である。さらに言えば、仮に (6)・(8) を発話した人間が不治の病に侵されいつ亡くなるかわからない場合であろうとも、(6)・(8) においてダⅡをガに置換することはできない。年齢は、たとえ亡くなるうとも、その基準・背景がぶれることは無いからである。ダⅡとガの選択は、その確実性に幅があるか(幅をもたせるか) どうかによる。

ここまで見てきたように、ダⅡの意味機能は「自身(を含む集団)の状況を相手(独り言の場合は自分になる)に示し、その情報を自分と相手との間で確認するためのもの(そして、ガとの比較によれば、その情報には話者本人の様子・意思・希望などを勘案した上での確実性が含まれる)」であると言えるだろう。そして、2. 3. で触れた、ダⅡ・デスⅡが共起する理由もここにあるのではないか。どちらも文章の必須要素ではなくオプション的要素という枠組みに属するが、デスⅡは「丁寧」、ダⅡは「状況確認」と、それぞれ有する意味機能が異なるため、共起させることが可能なのだと考えられる。

ただし、ダⅡは、担う意味機能はかなり幅広いものとなっているようである。以下の例で確認する。

(12) 相手に何かを依頼する時に

コレ タノンデ イイダ↑ (これを頼んでもいいか?)

(13) 相手からの依頼を承諾する時に

イイダ (いいよ)

(14) 友人を誘う時に

アシタ ノミニデモ イクダ↑ (明日飲みにでも行かない?)

(15) 相手に何かを提案する時に

サカナリョーリワ ドウデスダ↑ (魚料理はどうですか?)

(16) 相手の提案に賛同する時に

イイデスダ (いいですね/いいですよ)

上の例文で確認できるように、ダⅡは、通常共通語で使い分けられている「ね・よ・か」等の終助詞・間投助詞に対応する形で用いられる。いずれも話し手の何らかの意思を相手に確認するためのものであることには違いないが、共通語の終助詞の内どこまでの働きをダが担えるのか、出現環境に偏りがあるのか等については、今後さらに調査が必要であろう。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、当該方言において特徴的なダ(ダII)を、共通語でも用いられるダ(ダI)や日本語においてダの丁寧表現とされるデスの当該方言でのあり方などと比較しながら論じてきた。結果、従来詳細な識別や機能の記述がなされていなかったダを、その役割・機能について精査することで、ダにはダIとダIIという同音でありながらも全く異なるものであることを、新たな見地から再定義してきた。

ここまで、島根県松江市方言におけるダを論じてきたが、丹羽一彌(2009a)では、長野県松本市方言でも、島根県松江市方言と極めて類似するダについて指摘している。松本市方言では、ダが平叙文では「のだ」、疑問文では「のか」の意味を示し、以下のように使うという。

- ・キョーイクダ (今日行くのだ)
- ・カオワ ワカイダ (顔は若いだ)
- ・フタリブン ハラッタダ (二人分払ったのだ)
- ・センサーダダ↑ (先生なのか)

このように、オプション的要素として用いられるダは島根県松江市方言にのみ観察されるものとは言い難く、また松江市方言では確認できなかった、ダIとダIIの併用と思しき使用例を確認できる。これは各地方言との対照という詳細な研究でオプション的要素のダを捉える必要があるだろう。

また、『日本国語大辞典』(第二版, 小学館(2003))では、断定の助動詞の項にダについて以下のような記載がある。

終止形は普通には用いられないが、近世以来、終助詞的なものとして、関東の方言に現れる。たとえば、「なけ無の一ッてうらを着殺(きごろし)に着切てしまふだ」(滑稽本・浮世風呂 - 二・上)など。(p. 571)

ここに見られる「しまふだ」のダも本稿で扱ったオプション的要素としてのダとその接続が極めて類似している。このような使い方をしたダがどのように各地の方言に広がっていったかは、未だわかっていない。このように、方言のみならず、史の変遷も含めた広い視点に立ったダの調査・研究が望まれる。今後の課題である。

<sup>1</sup> 今回の調査は、言語形成期以前から現地で生活する話者A・Bと、高校卒業後、進学に伴い東京に移住した話者Cを対象とし、面接調査を行った。

A 1947年生まれ 男性 / B 1947年生まれ 女性 / C 1946年生まれ 女性

<sup>11</sup> 丹羽一彌(2005)、丹羽一彌(2009a)では、文の述語構造は以下のようになっているとしている。

[[[命題]判断]態度][働きかけ]

また、「述語という文法的な役割を備えた文成分を構成するためには、[命題]と[態度]という2個の枠に入る形式が必要」(2009a, p11)であるとしている。日本語において、一語で[命題][態度]どちらの形態素も備えており、そのみで述語となりうる単語は動詞と形容詞に限られるため、今回は、細分化した詳細な説明をするのではなく、単に動詞・形容詞と表記する。

<sup>12</sup> 丹羽一彌(2009b)では、さらに詳細に、A類のデスとB類のデスの差異を示している。具体的には、両者では「接続・形式の構造・意味機能・職能・対応する非丁寧形式」が異なるとしている。

<sup>13</sup> これ以後も行うI/IIの分類だが、ダ・デスともにタと共起させた際、ダ・デスがタの前後どちらに現れるかで分類を視覚的に判断することもできる(タの前ならばI、後ろならばII)。これは、Iに分類される場合のダ・デスは丹羽の言う[判断]に当たり、IIに分類されるそれらは[態度]に当たるからである。つまり、視覚的に異なった場所に現れているのは、それらが属している文を構成する枠組みの差異



によるものである。ちなみに、タは丹羽によれば[判断]に当たる。

<sup>v</sup>表5中、網掛けの部分がダのみ・ダとデスの共起で分布が変わる部分である。ダのみの場合はダIであったものが、デスとの共起により、ダIIに変化している。

<sup>vi</sup>ここでいう高低は、相対的なものであり、絶対的なものではない。さらに話者本人の判断によるところが大きい。

## 参考文献

神部宏泰 (1982) 「7 島根県の方言」『講座方言学 中国四国地方の方言』国書刊行会

丹羽一彌 (2005) 『日本語動詞述語の構造』笠間書院

丹羽一彌 (2009a) 「ダ述語についての試論」名古屋方言研究会会報 25号

丹羽一彌 (2009b) 「デスによる丁寧表現」東海学園 言語・文学・文化 第8号

松丸真大 (2005) 「島根県松江市方言のガ系文末詞」阪大社会言語学研究ノート7

付記 本稿は、日本語学会 2011 年度春季大会（於千葉大学）での口頭発表に加筆・修正したものである。発表の際、多くのご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

（ちば・たかし 中部大学嘱託講師）

